様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月 16　日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010　～2012
課題番号：22520741
研究課題名（和文）
初期ソヴェト体制における支配構造の研究
研究課題名（英文）
A study of the ruling system in early Sovet-Russia.
研究代表者
梶川　伸一（KAJIKAWA　Shinichi）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：50194733

研究成果の概要（和文）：レーニン時代のソヴェト初期体制は、民衆対コムニストとの対立を基盤としたため、民衆への抑圧が必然化された。だが、軍事力の動員には限界があり、この抑圧機関としてチェー・カーを中心とする「赤色テロル」の行使が不可欠であった。従来は、ソヴェト=ロシア史の裏で登場するチェー・カーこそが当時の支配体制の根幹であった。この機関を中心に発生する様々悲劇を、割当徴発の実施、割当徴発から新経済政策への政策転換、クロンシタット反乱とアントーノフ蜂起、教会弾圧の状況下で具体的に検討した。そこで見えてくるのは、党エリートの特権を擁護するための様々な反民衆的政策の具体化である。

研究成果の概要（英文）：In early soviet-Russia the ruling system of Lenin period was based on the structure of the superiority of communists to the masses, so it needed the repressive organ over the masses. But because at that time military power was coming to the end of the line, “red terror”　mainly performed by CheKa was vital for this ruling system. Many tragedies in this repressive system ware researched in the cases of collections of tax in kind, introducing of NEP, suppressions of Kronshtadt revolt and Tambov uprising and the anti-church policy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：ソヴェト=ロシア史
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：レーニン、ソヴェト=ロシア、ネップ、赤色テロル

１．研究開始当初の背景

ソ連が崩壊してすでに 20 年が経過しているにもかかわらず、初期ソヴェト体制、すなわち、レーニン時代の支配構造についての研究は、スターリン体制の研究に比べて、きわめて遅れているロシア史学界の現状を打破する必要があった。特に、レーニン支配の構造については日本だけでなくロシア史学界でも多くの研究者はすでに関心を失っているように思われた。

２．研究の目的

これまでロシア史文献で解釈されてきた様々な「神話」を解体し、新たな歴史像を構築することである。特に、１．で触れたように、レーニンの支配構造については、強制集団化や階級としてのクラークの絶滅のようなスターリン批判をともなう彼の支配構造の研究に比べ、その立ち後れは明らかである。その妨げの大きな要因になっている、ネップの導入についてなどの、従来の解釈を根本から再検討する必要がある。

３．研究の方法

基本的には、従来のステレオタイプ的解釈を排除し、これまでの「神話」に囚われない新しい歴史解釈を行うことである。その際には、解釈の合理性とロシアにあるアーカイヴ資料に基づく実証性の徹底化である。従来は無批判に取り入れられていたアーカイヴ資料を点検、検証し、それを単なる事実として取り入れる方法を極力排除している。同時に、これまでのアカデミックな研究では無視されてきた反革命勢力のオリジナル資料も、充分な検証後に、活用され、できるだけ民衆の生の声を取り入れている。また、地方の実情を拾うために、広く新聞情報（特に地方紙）の収集にも努めた。

この考察の基本的立場は、これまで 1917 年 10 月 25 日に発生したボリシェヴィキの権力奪取を十月革命としてではなく、単なるクーデターとして、すなわち、民衆の参加無しの軍事蜂起とする見解である。レーニン支配の構想は当初から、民衆の生活改善が視野に含まれていなかったとするのが、この研究での出発点になる。

個別史、地域史でなく、外国人研究者にとって必要なことは、歴史の全体像を描くことであり、常に個別的事例を全体性との関連の中で考察するようにした。

４．研究成果

(1) 農民大衆から農産物調達を実施する際に常に「赤色テロル」をともない、それは戦時共産主義期の割当徴発でも、ネップ期の現物税の徴収でも同様であった。すなわち、「赤色テロル」に基づく弾圧体制である点で、ネップによって農民に対する宥和政策が実施されるようになったとのこれまでの通説に反して、戦時共産主義期とネップ期との間に相違は見られないことを実証。日本の学界では先駆的主張。

(2) 一般には 21 年 3 月のロシア共産党第 10 回大会での、割当徴発から現物税への交替決議によってネップが導入されたと解釈されているが、割当徴発の停止は播種キャンペーンを実施するために、現物税の導入はこれに対するプレミアを与えるために、それぞれが当時最大の党の課題として設定されていた播種キャンペーンを成功裡に実施するため、

別の論理によって導かれたものであった。だが、3 月 21 日づけ現物税政令まではこの方針が貫かれていたが、これとは異なる目的で 3 月 28 日づけ交換に関する布告が出された。この布告の目的は、割当徴発の停止に関連して急速に悪化する食糧危機を緩和するため、飢餓民救済対策として即座の自由交換を認めることであった。こうして、通説によればネップが開始されたが、その方針は党大会決議とは異なっていたことをアーカイヴ資料に基づき実証した。この見解は、ロシア史学界でも評価され、学会での招待報告となった。

(3)飢餓民救済の名目ではじまった教会貴重品収用キャンペーンは、実際にはネップ期における国内経済復興の原資の形成を目的とした。その際、全ロ・ソヴェト中央執行委を中心とする公然組織ではなく、トロツキーを中心に非公然の組織がこのキャンペーンを実質的に指導したことが特徴である。このキャンペーンの行き詰まりとともに、教会弾圧は教会貴重品収用から聖職者の司法的弾圧へと転換するようになった。日本ではアーカイヴ資料に基づくボリシェヴィキの宗教政策に関する研究はなく、ロシア史学界で先駆的見解。

(4)22 年 10 月にソヴェト飢饉救済組織の解散が決定された。飢饉が完全に終息されない中でのこの措置は、教会貴重品収用キャンペーンが予想した成果を挙げなかったために、経済復興の原資を獲得するために必要となった穀物輸出を開始するためであり、こうして文字通りの飢餓輸出がはじまった。ロシア史学界で先駆的見解。

(5)21／22 年飢饉はこれまでの文献ではヴォルガ中下流域が最大の罹災地とされてきたが、様々な理由によりロシア共和国周辺の非ロシア人民族地域が大きな被害を受けたことを、ロシア、欧米資料を駆使して明らかにした。これは先駆的研究ではあるが、さらに、ウクライナの実態から見られるように、飢饉を秘匿し、そこから中央ロシア向けに大量の穀物を汲み出したことがそこでの被害を甚大にした要因であることを実証した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1　件）

①梶川伸一「ボリシェヴィキ権力と二一／二二年飢饉」、『史林』九六巻一号（『災害』特集号）、128-166 ページ　査読あり

〔学会発表〕（計 4　件）

①梶川伸一「1921 年 3 月－ネップ神話のはじまり」、　慶應義塾大学　社会史コロキウム／社会民主主義研究フォーラム、　2012 年 12 月 15 日、慶應大学

②梶川伸一「ボリシェヴィキ権力と 21/22 年飢饉」、史学研究会例会テーマ『災害』、2012 年 4 月 21 日、京都大学

③梶川伸一「レーニン時代の民衆支配」、早稲田大学ロシア研究所、2010 年 10 月 15 日、早稲田大学

④梶川伸一 Почему к как большевики перешли к нэпу.　スターリン主義の歴史　国際学会、2010 年 9 月 30 日、ロシア・ウラル

国立大学

〔図書〕（計　4 件）

①梶川伸一、Пенза-Саранск. Ленинский политический режим и голод в 1921-1922 гг. //Новейшие исследования отчетсвенных и забежных историков.2012.270(102-1149).

②梶川伸一、日本経済評論社、「「赤色テロル」と 1922 年の教会弾圧」、野部公一、崔在東・編『20 世紀ロシアの農民世界』、2012 年、402(93-130)

③梶川伸一、РОССПЭН,Ленинский вариант перехода к нэпу //История Салинизма: Крестьянство и власть. 2011.421(88-95).

④梶川伸一、訳、S・P・メリグーノフ著、社会評論社、『ソヴェト=ロシアにおける赤色テロル』、2010 年、290.

６．研究組織

(1)研究代表者

梶川　伸一　（KAJIKAWA　Shinichi　）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：50194733

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし